

令和元年～3年度
3か年研究主題

子どもと創る「深い学び」

— 子どもと共に、学びをつなぐ授業づくり —

愛媛大学教育学部附属小学校

本校の考える「深い学び」

〈自己効力感〉を原動力として、自ら学習材や他者とつながり、自己の学びを自覚する中で、身に付けた力を「生かし、発揮しよう」とする姿が表れる学び

「主体的・対話的」な学び

本校園における〈自己効力感〉の定義

目の前の課題に対して、きっとできる、うまくできる、よりよくできるという肯定的な感覚。



自分にはできない 自分にはできる

学びをつなぐカリキュラム・マネジメント

カリキュラム・マネジメントのサイクル

教科等横断的な単元構想

学年間及び校種間(中学校)の系統性を意識した単元一覧表の修正・活用

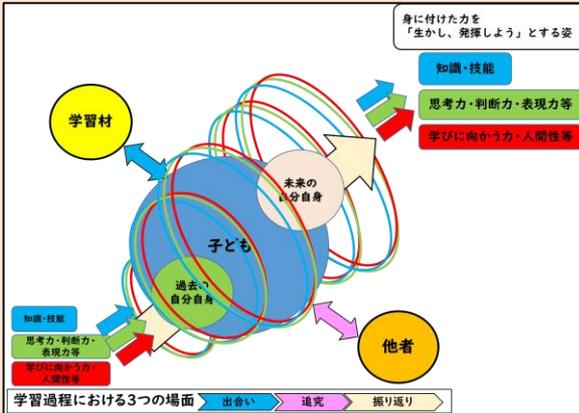
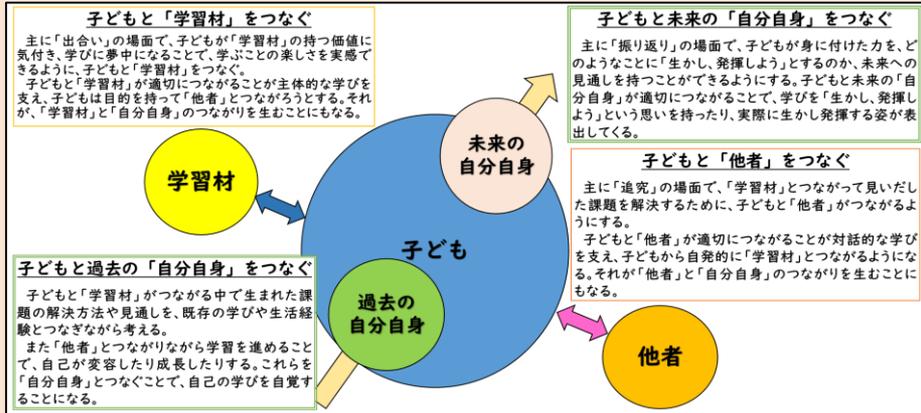
教科等の関連を図る単元一覧表の修正・活用

○教材名、単元名のみ示した単元一覧表を作成している。学習内容の関連や資質・能力の関連を意識して、教材名、単元名を枠で囲み、線で結んでいる。
○教科等横断的な単元ごとに、枠と線の色を分けることで、つながりが一目で分かるようにしている。

附属幼・中・高・特支、大学との連携

学びをつなぐ授業づくり

「子どもと創る「深い学び」」の過程

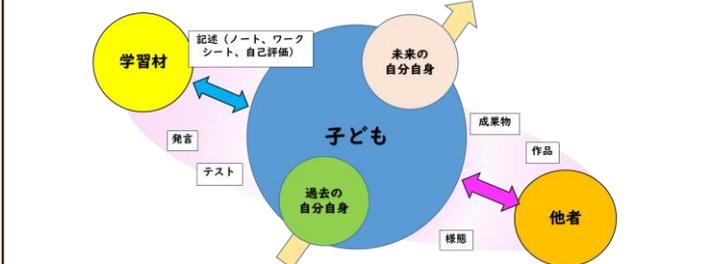


「深い学び」を評価する

【指導者評価】
子ども一人一人の学びを「空間軸」と「時間軸」でつないで見取る

【自己評価】「自分自身」とつなぐ
○学びにおける変容や成長を「自分自身」にどう自覚させるか
○何を学び、何ができるようになったのか・学び方はどうだったのか

【指導者評価にあたって】
(三つの資質・能力が育てられているか)
・ 育成を目指す資質・能力や目指す子どもの姿を単元開始前や授業前に具体的に描く。
・ 学習指導要領を基にして、その単元に適した評価規準を作成する。
・ 子どもにどのような姿が表れるのかという明確な姿をイメージする。
(「深い学び」を実現しているか)
・ どの場面で、どのような姿として子どもの姿が表れてくるかをイメージする。



主に未来の「自分自身」とつなぐ自己評価
「振り返り」の場面においては主に未来の「自分自身」とつながるようにする。そのために、「学びをどう生かし、発揮するか」という視点で振り返りをさせる。また、実際に単元の中に「生かし、発揮する場」を設定することで、学びを生かすことができるようになることも考えられる。
(言葉掛けの例)
「新しい課題を解決するために」次の学習は何をすればよいですか」「この単元で学んだことを生活の中でどのように生かしますか」

主に現在の「自分自身」とつなぐ自己評価
学習課題解決のために「学習材」や「他者」とつながることで、子どもは多様な考えに触れ、課題に対する自分の考えを練り直したり捉え直したりする。このように「学習材」や「他者」とつながり、自分の考えを確かなものにしたり、子ども自身が成長したりしていく。こうした「学習材」や「他者」とのつながりによる自己の変容や成長を認知させる。
(言葉掛けの例)
「今日の授業で自分の考えはどのように変わりましたか」「友達と協力してどのようなことができるようになりましたか」

主に過去の「自分自身」とつなぐ自己評価
「出会い」の場面で出された学習課題をどうすれば解決できるのか、また、課題解決のために自分は何をすればよいかといった見直しを持たせる。そのために、これまでの学習や生活経験といった過去の「自分自身」とつながる視点を提示する。この自己評価を通じて、学習の目的意識や課題解決への思いを教師は記述等から確認する。
(言葉掛けの例)
「今まで学習したことごどのようなことが使えそうですか」「これからの学習でどんなことをしてみたいですか」